アテナイ植民者のアイデンティティー

——プロソポグラフィックなアプローチの試み——

前野弘志

はじめに

アテナイとその植民市との関係に関する従来の研究は、[1]専ら市民権という法的な権利に着目してきた。その際、ある植民者が母市市民権を保有していたか否かが細かく検証され、もしある植民市が母市市民権を保有する植民者から構成されていることが明らかになった場合には、その植民市は母市に従属的に結び付けられていたと見なされ、それがアテナイ帝国支配の手段として利用されていたと評価された。そしてそのような事例が多く確認されると、前五世紀におけるアテナイ植民帝国主義とも呼ばれ得るような像が結ばれることとなった。

しかし、そもそも植民者が母市市民権を保有するということは、本当に彼らが母市と緊密な関係にあったこと、ひいては母市に対して従属的な関係にあったことを意味するのであろうか。確かに制度上はそう言えるかも知れない。しかし植民者が実際に母市に対してどのような感情を抱いていたのか、また逆に、母市市民が植民者に対してどのような態度を示したのか、といった実態面については、そこからは何も引き出すことが出来ない。それにもかかわらず、従来の研究がこのことに満足していた背景には、植民市を見る眼差しが専ら母市アテナイから植民市ないしは植民者に向けられていたことがあったのではないであろうか。そこで小稿では、植民者諸個人に焦点を当てて、[2]植民者の視点から母市ないしは植民市を見ることを試みたい。そうすることによって、母市植民市関係の新たな側面が見えてくるであろう。

第一章　母市植民市間の地理的・心理的距離

まず、母市植民市間の距離が考察されなければならない。尺度上の距離は心理上の距離に反映されたと考えられるからである。そこでペイライエウス港を起点として、一．イオニア・ヘレスポントス・黒海方面、二．エウボイア・トラキア方面、三．アイギナ・シケリア方面、の三地区にまとめて、各植民市までの道筋と距離を測ることとする。

一．イオニア・ヘレスポントス・黒海方面

この方面には、まずキュクラデス諸島のアンドロス、ナクソス、メロス、イオニア地方に渡ってサモス、ノティオン、そこから北上してアイオリス地方のレスボス島の諸市（ミュティレネ等）、トラキア地方のケルソネソス半島の諸市（エライウス、セストス等）、及びヘレスポントス周辺のレムノス、イムブロス、そこからプロポンティス海のアスタコス、黒海南岸のシノペ、アミソスが位置する。

まず、ペイライエウスからサモスまでの海路について見てみよう。ペイライエウスを出航した船は、まずスーニオン岬を目指して航行するが、航路はそこで二手に別れていたようである。一つは、そこからそのままキュクラデス諸島の中程を通るルートで、これが最短コースであったらしい（Strab. C636）。もう一つは、少し遠回りになるが、一旦エウボイア南端のゲライストスまで北上し、そこからアンドロスを経由して行くルートである（Thuc. 3.3.5; Hdt. 5.121）。ゲライストス岬は、アジアからアッティカへ渡航する際の一つの通過点であったと言われている（Strab. 10.1.7）。スーニオンからゲライストスに近いレウケ岬までの距離は三〇〇スタディオン（以下 st と表記する）である（Strab. C399）。その後は、これら二つのルートが再び合流し、中継地点であるデロスないしはミュコノス（Thuc. 3.29.1–2; 8.77.1; 86.1）、あるいはナクソスに寄港した（Hdt. 5.31; 6.95; 96–97; 99）。それから、コルシアの島々とメランティオイの岩礁の間を通り（Strab. C636）、イカロスに寄って（Thuc. 3.29.1–2; Hdt. 6.95）、サモスに至った。

さて、ペイライエウスからサモスまで航行するのに何日を要したのであろうか。これに関して興味深い史料が三つある。一つは、アテナイから一人の男がエウボイアへ渡り、陸路ゲライストスに向かい、そこからちょうど出航しようとしていた商船に乗り、順風に恵まれてアテナイを出て三日目にミュティレネに到着したという記述（Thuc. 3.3.5）、もう一つは、スパルタを発ち、やはり順風に恵まれて三日目にイリオンに到着したという記述（Hdt. 2.117）、もう一つは、サモスの対岸にあるトロギリオスという小島からスーニオンまでの航路は、最短距離で 1600 st あるという記述（Strab. C636）である。つまり、これらの史料に加えて、1 st の長さと船の速度が得られれば、大体の日数が割り出せることになる。

勿論、風や海流による誤差は承知の上でである。まず 1 st の長さは、トゥキュディデスの場合 0.13 km から 0.175 km、[3] ストラボンの場合 0.18 km、[4] とされているので、1 st = 0.18 km としよう。次に当時の商船は、日中時速 9 km、三段櫂船も普段は 9 km、最高 13 km で航行できたと言われている。[5] そこで、サモス・スーニオン間の 1600 st = 288 km とスーニオン・ペイライエウス間の 300 st = 54 km を足し、この距離を時速 9 km で航行したとすれば、三八時間かかる計算になり、ペイライエウスを発って一日半、つまり二日目にはサモスに到着したことになる。この値は、ペイライエウス・ミュティレネ間の三日目と比較して妥当であるように思われる。これから類推すれば、アンドロス、ナクソス、メロスには一日の内に到着出来たと考えられるであろう。

続いて、ペイライエウスからヘレスポントスに至る航路について見てみよう。これがサモスへ至る航路の延長線上にあったことは間違いない (Thuc. 8.22.1; cf. Thuc. 8.8.2; 23.5; Hdt. 9.106)。この航路は、夏期のみならず冬期にも開かれていたことがいくつかの史料から裏付けられる (Thuc. 8.39.1-2)。サモスを発った船は、大陸の沿岸にそって航行し、エフェソスを通過し、テオスに向かい (Thuc. 8.15.1-2)、そこのミュオンネソスに寄港したが (Thuc. 3.32.1-2)、その間にノティオンが位置する。テオスを過ぎると、コリュコス山を右手に見ながらそれを巡り (cf. Thuc. 8.14.1)、アルギノン岬とキオス島の間を通過して、キオスに到着した (Thuc. 8.34.1)。このあたりでは、冬の間よく嵐に遭ったらしい (Thuc. 8.34.1; 32.1; 31.2 cf. Thuc. 8.16.1-2)。また夏には北風もよく吹いた (Thuc. 8.80.3; 8.99.1; Hdt. 5.33)。

さらに続いて、キオスからレスボスに向かうが、それにはマレア岬を通ってミュティレネを目指す東周りルートと (Thuc. 8.100.1; 101.1-3)、ピュラ、エレソスを目指す西周りルートの (Thuc. 8.23.2) 二つがあった。キオスからヘレスポントスに至る航路について時間の経過が窺い知れる史料がある (Thuc. 8.101.1-3)。それによると、キオスにいたミンダロスは、急いで出航し、外洋に出ず、エレソスにいた敵船に遭遇しないように、左にレスボスを見ながら、大陸沿いに航行し、カルテレイアで朝食をとった。それからキュメへ航行し、アルギヌーサイで夕食をとった。ここはミュティレネの対岸である。そこから夜遅く出航し、メーテュムナの向かい側にある大陸のハルマトゥスに到着し、急いで朝食をとった後、レクトン、ラリサ、ハマクシトスなどの諸市を通って、夜半少し前にはヘレスポントスのロイティオンに到着したと云う。つまり、この航海の間に二回の朝食と一回の夕食をとっているので、一日半の時間の経過が読み取れる。その内訳は、キオスからミュティレネまで半日、ミュティレネからハマクシトスまで、少し時間がかかりすぎている感じがするが、丸一日となろう。キオスからレスボスまでは、南風に乗って約 400 st = 72 km と言われている (Strab. C645)。

この距離を当時の船で航行したとすれば、八時間すなわち1/3日となるが、これはおそらく外洋を直行するコースであったと思われる。そうだとすれば、沿岸ルートのキオス・ミュティレネ間の半日という数字は頷ける。以上のことから、ペイライエウスからヘレスポントスへは三日半、つまり四日目には到着することになろう。

ヘレスポントスに入る前に、向かいにあるレムノス・イムブロスについて見てみよう。これらの島々は、ヘレスポントスを追われたアテナイ船が逃げ込む避難所のような役割を果たしていたようである（Hdt. 6.41; 104; Thuc. 8.102.2）。その際のヘレスポントス側からの出航地は、ロイティオンの対岸に位置するエライウスであった（Hdt. 6.140; Thuc. 8.102.2）。これについては、ミルティアデースによるレムノス征服のエピソードがある。それによると、ペラスゴイ人はもし北風を受けた船がアッティカからレムノスまで一日で達することが出来たなら島を明け渡そうという絶対に起こりえない約束をしたが、彼は季節風の時期に当時アテナイの植民市となっていたケルソネソスのエウイウスからその島まで船で渡り、約束を成就させたという（Hdt. 6.139-140）。エライウスからイムブロスまで約 17 km、レムノスまで約 50 km なので、風が無くても当時の船で、前者は約二時間、後者は約五時間ということになろうか。従って、ペイライエウスからは四日目の内には到着出来たであろう。

ところで、イムブロス・レムノス・スキュロスを結ぶ航路が存在したのであろうか。スキュロスについては史料がそもそも少ないので分かりにくいが、そのような航路に言及した記事は見付けることが出来なかった。外洋を通るこのルートは、否定は出来ないが、極力避けられたのではないであろうか。

それではヘレスポントスに入って行こう。まずエライウスからセストスまでは 170 st＝31 km（Strab. 7.9）、セストスとアビュドスの間の渡しは 30 st＝5.4 km（Strab. C591）、アビュドスからイリオンまで 170 st＝31 km（Strab. C591）、アビュドスからラムプサコスまでも同じく 170 st＝31 km（Strab. C589; 591）、ラムプサコスからカリポリスの間の渡しは 40 st＝7 km（Strab. C589）、カリポリスからクリトテ、パクテュエ、アゴラを通ってカルディアに出るが、そこからケルソネソス半島の外周りでエライウスまで 400 st＝72 km あるという（Strab. C7.9）。従って、ヘレスポントスの内を通っても外を通ってもほぼ同じの 400 st＝72 km となり、当時の船なら八時間で半島の付け根まで行けることになる。従って、ペイライエウスからここまではなんとか四日目の内に至ることが出来るであろう。

ここからビュザンティオンに向かうために、プロポンティス海の中程を進む（Strab. C584）。プロポンティスは、アビュドスから約 5 km＝28 st 南にあるキュノス・セーマ岬から始まり（Strab. 7.9）、長さ 1400 st＝252 km と言われているので（Strab. 7.9）、ラムプサコスからビュザンティオ

ンまでは、1400 st＝252 km から 170 st＝31 km と約 5 km＝28 st を引いて 1202 st＝216 km となる。これは当時の船で二四時間かかることになる。従って、ペイライエウスからビュザンティオンの手前のアスタコスまでは丸五日間で六日目としておこう。

さらにビュザンティオンからカルペを経由してヘラクレイアへ向かうが、その間は三段櫂船で丸一日かかるという(Xen. Anab. 6.4.1–3)。そこからさらにシノペまで 2000 st＝360 km あるが (Strab. C546)、順風に恵まれれば二日間でヘラクレイア・シノペ間を沿岸航行が出来たと伝えられている (Xen. Anab. 6.2.1–2)。ここで日数と里程の両方の値が得られたので、今までの計算の妥当性を検証して見よう。360 km を時速 9 km の船で航行したとすれば四〇時間となり、二日かかったという情報は納得の行くものであると言えよう。従って、これまで用いてきた船の時速とストラボンの里程は、あながち見当外れではなさそうである。さらにシノペからアミソスに至るが、その間の距離は 900 st＝162 km で (Strab. C547)、当時の船なら一八時間かかったことになろうか。トラペズスの近くのケラススの西約 100 km に位置するコトュオラからシノペへ至るのに順風を受けて丸一日かかったと言われていることから (Xen. Anab. 6.1.14–15)、シノペからその中間にあるアミソスまで半日かかったとするのは妥当であろう。従って、ペイライエウスからシノペまでは九日目に、アミソスまでは一〇日目に到着ということになろう。

二、エウボイア・トラキア方面

この方面には、まずエウボイア島の諸市（カルキス、エレトリア、ヘスティアイア、カリュストス等）及びスキュロス、そこから北上してトラキア地方のエイオン、アムフィポリス、ポティダイア等が位置する。

エウボイアは、アッティカからわずかな幅の海峡を隔てて、細長く横たわっているため、地理的にも近いが、ペロポネソス戦争中、アッティカよりも重要なエウボイアと言われたり (Thuc. 8.96.2)、ペリクレスによる籠城作戦の際には、田園に住むアテナイ人が婦女子や家財道具を市内に避難させたのと同時に、牛や羊をエウボイアに疎開させたりしたことから (Thuc. 2.14.1–2)、その心理的近さも窺われる。

アッティカとエウボイアは複数の地点で結ばれていた。まずカルキスとアウリスの間 (Strab. C444)。ここは、エウボイアと本土が最も接近している地点で、その距離はわずかに二プレトン（＝60 m）であり、ストラボンの時代にはそこに橋が架けられていたという (Strab. C403; 400)。アテナイ人はここを渡ってカルキスに植民者を残した (Hdt. 5.77)。次はカルキスから約 23 km 南のエレトリアとアッティカの属領であるオロポスとの間 (Thuc. 2.23.2)。その間は 60 st＝12 km (Thuc. 8.95.3; cf. Strab. C403) で、エレトリアで上げられたのろしがオロポスから見える距離で

ある（Thuc. 8.95.4）。ペルシア軍が侵攻してきた時、カルキスにいたアテナイの植民者はエレトリアに向かい、そこからオロボスに渡って避難した（Hdt. 6.100-101s）。またこのルートは、エウボイアとアテナイを結ぶ重要な輸送路で、オロボスに陸揚げされた荷物は、デケレイアを通ってアテナイに運ばれていた。デケレイアとアテナイの距離は約 120 st＝21.6 km あり（Thuc. 7.19.2）、オロボスとデケレイアの距離も大体同じである。ペロポネソス軍によってデケレイアが占領されて後は、この道が遮断され、その代わりにやむなくスーニオン岬を廻る海上輸送の道がとられるようになったという（Thuc. 7.28.1）。

ペイライエウスからスーニオン岬まで 330 st＝59 km（Strab. C391）、スーニオンからエウボイア南端のゲライストス岬まで 300 st＝54 km（Strab. C399）、スーニオンからカルキスまで、途中に難所であるコイラと呼ばれるエウボイアの凹みを通って（Strab. C445; Hdt. 8.13）、670 st＝121 km ある（Strab. C403）。この岬の近くにカリュストスがあり、その近くにステュラのマルマリオンがあるが、そことアッティカのハライ・アラフェニデスを結ぶ航路があった（Strab. C446）。また、マラトンとエレトリアを結ぶ航路もあった。これは、ヒッピアスがペルシア軍をエレトリアからマラトンへ誘導したルートでもあり（Hdt. 6.102）、その四八年前にペイシストラトスとヒッピアスがアテナイへの帰国を強行した時に、エレトリアからマラトンに上陸したルートでもあった（Hdt. 1.62）。

ここで各航路の所要時間を割り出しておこう。まずオロポスからエレトリアやカルキスへ行く場合には、アッティカの国境からその日の内に到着出来た。一方、ペイライエウスからスーニオン岬を廻って、カリュストスへ向かう場合は、330 st＝59 km と 300 st＝54 km を足して一二時間つまり半日、カルキスへ至るには、330 st＝59 km と 670 st＝121 km を足して二〇時間つまり丸一日かかる。いずれにしてもその日の内にたどり着けた。次にヘスティアイアへは、エウボイア南端のゲライストス岬から北端のケナイオン岬まで約 1200 st＝216 km とされているので（Strab. C444）、その間二四時間かかる。従って、ペイライエウスからケナイオン岬のあるヘスティアイアまでは（Strab. C446）、一二時間を足して、三六時間つまり一日半かかり、二日目には到着ということになろう。ゲライストスから海峡を通らないで、外洋側を沿岸航行して、スキアトス島へ至る航路もあった（Hdt. 8.7）。

さて、トラキアへ向かうルートは、エウリポス海峡を通過して、さらに北上していった（Thuc. 7.29.1-3）。ヘスティアイアの近くにアルテミシオン岬があるが、その岬の沖で、スキアトス島と本土のマグネシアとの間が狭まって、水路が形成されている（Hdt. 7.176）。アルテミシオンからスキアトスで上がった信号が見えたと言う（Hdt. 7.183）。またマグネシアのアフェタイからアルテミシオンまで 80 st＝14

km あるが、その間を一度も浮き上がることなく潜水して渡り切った男がいたという噂がある程である。もっともこれを収録したヘロドトス自身これを信じていないが（Hdt. 8.8）。いずれにしろ、この水路が交通の要所であったことには間違いない（Hdt. 7.183）。

アフェタイの近くに、場所は確定出来ないが、セピアス岬がある。ここから航路はマケドニアのテルメに向かう。その間の航海には丸一日かかったという記録がある（Hdt. 7.183）。テルメあるいはその手前にあるピュドナからトラキア最大の要地であるポティダイアに向かう（Thuc. 1.61.4-5; 68.3）。そこからメンデ（Thuc. 4.129.3）、スキオネ（Thuc. 4.130.1）、トロネ（Thuc. 5.2.1-4; 3.5; 5.6.1-2）へと航行し、さらに難所のアトス岬を周航して（Hdt. 6.44-45）、ストリュモン河口にあるエイオンの港に入り（Thuc. 4.106.3; 108.1）、そこから 25 st＝4.5 km 上流にあるアムフィポリスへ（Thuc. 4.102.3）、船で至った（Thuc. 4.107.2）。アムフィポリスは「九路」と呼ばれる交通の要所であり（Thuc. 1.100.3; 4.102.3）、タソスとは船で半日の距離であったという（Thuc. 4.104.4）。エイオンもまた、アブデラ、アビュドスへと至るヘレスポントス方面のもう一つの航路の結接点であった（Hdt. 5.13; 8.117-120; 7.113-114; Thuc. 4.50.1-3）。

これらの諸都市間の里程に関しては詳しい史料が得られなかった。地図の上で測って見ると、テルメからポティダイアまでが約 80 km すなわち九時間、ポティダイアからエイオンまで約 170 km すなわち一九時間、エイオンからアムフィポリスまでは三〇分ということになる。アムフィポリスとタソスの間が 80 km で半日行程であるならば、テルメからアムフィポリスまで約 250 km で二八時間は、許容範囲と言えようか。以上の結果に従って、ペイライエウスからポティダイアまで丸三日の三日目、エイオン・アムフィポリスまで丸四日の四日目としておこう。

三　アイギナ・シケリア方面

この方面には、まずサロニカ湾のサラミス、アイギナ、それからずっと離れて、アドリア海沿岸にも一つ植民市が建設されたが、場所については不明である。そして、イタリア南端のトゥリオイが位置する。

サラミスは、アッティカのアンピアレ岬から 2 st＝0.36 km 離れており（Strab. C395）、サラミスで焚かれた敵襲を知らせる烽火がアテナイから見える程の距離である。アイギナは、ペイライエウスから 100 st＝18 km の位置にあり（Strab. C375）、ペイライエウスから軍船で一気に漕いで渡れる程の距離である（Thuc. 6.32.2）。ペルシア軍侵入の際に、アテナイ人が婦女子をトロイゼンやアイギナ及びサラミスに疎開したことや（Hdt. 8.41）、アイギナがペイライエウスの目やにと呼ばれたことなどから（Plut. Per. 8.7）、両島の近さが窺い知られる。

アイギナの次の植民市はトゥリオイであるが、そこに至る

までの海路は、シケリア遠征にまつわるトゥキュディデスの記述からほぼ再現出来る。ペイライエウスを出航した船は、まずアイギナに向かい、そこで準備を整えたり（Thuc. 5.53.1）、他の船団と合流した（Thuc. 7.20.3）。そこからスキライオン岬を周り（Thuc. 5.53.1）、エピダウロス・リメラを通過し、難所として有名なマレア岬を周り（Thuc. 7.168; Strab. C368）、キュテラの対岸に寄港した（Thuc. 7.26.1-3）。この島は、エジプトやリビアからの商船も寄港する交通の要所であり（Thuc. 4.53.2-3）、ペロポネソスに対する重要な軍事拠点でもあった（Thuc. 4.54-57; Hdt. 7.235）。ここを過ぎると、ピュロスに向かい、フェイアを通過し、ザキュントスとキュレネの間を通って、ケファレニア、レウカスの東側を航行して、アナクトリオンに入る。次に、ケルキュラに至るが（Thuc. 7.20.3; 26.1-3; 31.5）、ここはイタリア・シケリアへ向かう航路の要地であり（Thuc. 1.36.2; 44.2）、船団は一旦ここに集結して、イタリア南端のイアプュギア岬を目指して、イオニア海を渡って行った（Thuc. 6.30.1; 34.5; 42.1; 43.1; 44.1-3）。ここから、タラス、メタポントン、ヘラクレイアを通過して、トゥリオイに到着したのである（Thuc. 7.33.3-5; Strab. C264; 278; 281）。

ペイライエウスからトゥリオイへ至るまでの日数はどのくらいであろうか。直接的な証言はないが、ディオンがアテナイから祖国シュラクサイに向けて遠征した時、一二日間は穏やかな風を受けて航海した後、一三日目にシュラクサイの南部にあるパキュノス岬に至ったことをプルタルコスが伝えている（Plut. Dion. 25.1）。それならば、パキュノス岬からトゥリオイまでの行程を割り出して逆算すれば、ペイライエウスからトゥリオイまでの行程が求められることになる。パキュノス岬からイタリア半島との接点になるペロリアス岬まで1130 st＝203 km ある（Strab. C266）。ペロリアス岬とカイニュス岬が対い合ってボルトモス海峡を形成し（Strab. C257）、それによってシケリア島とイタリア半島が隔てられているが、その間はわずか 20 st＝3.6 km である（Thuc. 6.1.2）。そしてストラボンは、この海峡からラキニオン岬までを 2300 st＝414 km とするポリュビオスの数字を引用しているが（Strab. C261）、これは実測とはかなりかけ離れたもので、この 2300 は 1300 の間違いであると一般には修正されている。[6] すると 234 km となり、地図上の実測と合致する。そこからクロトンまで 150 st＝27 km（Strab. C262）、さらにそこからシュバリスまで 200 st＝36 km あるというが（Strab. C263）、これもおかしい。そこでもう一つの計算をしなければならない。ラキニオン岬からイアビュギア岬に至るタラス湾に沿って航行すると二四〇マイル＝346 km あることが分かっているので（Strab. C261）、逆にイアプュギア岬からトゥリオイまでの距離が分かれば、ラキニオン岬からトゥリオイまでの距離も分かるはずである。さて、トゥリオイからヘラクレイアまで 330 st＝59 km（Strab. C264）、ヘラクレイアからメタポントンまで 140 st＝25 km

(Strab. C264)、メタポントンからタラスまで 240 st＝40 km (Strab. C278)、タラスからバリスまで 600 st＝108 km (Strab. C281)、そしてバリスからレウカまで 80 st＝14 km ある (Strab. C281)。このレウカはイアプュギアのすぐ近くなので、トゥリオイからイアプュギアまで 1370 st＝246 km になる。従って、ラキニオン岬からトゥリオイまでは、346 km から 246 km を引いて 100 km となる。この値は実測とほぼ一致する。そして、このシュバリスの跡地にトゥリオイが建設されたのであるから、パキュノスからトゥリオイまでは、203 km、3.6 km、234 km そして 100 km を足して、540 km すなわち船で六〇時間、つまり二日半かかることになる。従って、ペイライエウスからトゥリオイまでは、一〇日目に到着ということになろうか。この旅程が非常に長い航海であるという感覚を当時の人々が抱いていたことは、シケリア遠征に際する記述の所どころで示唆されている (Thuc. 6.30.2; 31.3; 31.6; 34.4; 37.1)。

さて、かなり大胆な計算をした箇所もあったが、とりあえず各植民市までの行程を以上のように割り出して見た。この考察から言えることは、三点ある。まず、一日行程のサラミスとアイギナ、キュクラデス諸島、そしてエウボイアは、目と鼻の先あるいは裏庭といった距離感であったこと、次に、二日から四日行程のイオニア地方、ヘレスポントス地方、トラキア地方に多くの植民市が建設されたことから、この程度の行程は許容されたと思われること、最後に、東西へ最も遠い植民市がともに一〇日行程であったことから、それがアテナイ植民の限界であり、当時の人々もそれ以上はかなり遠いと感じていたこと、である。この母市植民市間の近さ或いは遠さが母市市民と植民者の間の人間関係の規定に影響を与えたであろう。

第二章　差別される植民者たち

それでは、個々の植民者をプロソポグラフィックに見ていこう。植民市が戦争によって潰されて、やむなく帰国した引揚者はかなりいたが、彼らは母市市民によって必ずしも暖かく迎えられた訳ではなかった。ここでは、法的には同じアテナイ市民でありながら、帰国して差別された三人の植民者たちの事例が扱われ、その原因が考察される。

①哲学者エピクーロスは、ガルゲットス区の人でアテナイ人であったが、サモス植民者の子供であった。彼の父はネオクレス、母はカイレストラテで、フィライダイに連なる家柄であったらしい (Diog. Laert. 10.1)。サモスは、前三六五／四年、前三六一／〇年、前三五二／一年の三次に渡ってアテナイ人によって植民されたが、ネオクレスは恐らく第三次植民の際に移住したと考えられている。[7]

エピクーロスは一八歳の時にアテナイに戻ったと伝えられている。その年は前三二四年なので、彼の生年は前三四二年になるから、彼は間違いなくサモスで生まれたことになる。

アテナイに戻った理由は、エフェーボスになるためであった(Strab. 14.1.18)。エフェーボスとは一八歳になった市民に課せられる軍事教練で、期間は二年である。その間に各種兵器の使い方や、ポリス市民としての心構えを学び、実際に港や国境の警備に当たる。またこれに先だって、法定年齢に達しているかどうか、自由人であり合法的な生まれであるかどうかが審査される(Aristot. Ath. Pol. 42.1-5)。つまり、エフェービアという制度は、市民登録のための重要な手続きであった。

エピクーロスはエフェーボスの勤めを果たし、合法的にアテナイ市民と認められたはずである。それにもかからわず、彼には悪い噂が付きまとったと云う。犬のように恥知らずで最も育ちの悪い者、惨めな給金もらい、遊女との同棲、五〇通もの淫らな恋文、おべっか使い、快楽主義者、卑猥な話をする男、無知、大食家、貧弱な体質、口汚い男、等々。その中で見逃せないのが、彼が合法の市民ではないとの噂である(Diog. Laert. 10.4)。彼はサモスおよびテノスで育った。アテナイに行ったのは、その時が初めてだったのかも知れない。彼の「母市」には実際には彼を見知った人がほとんどいなかったのではないであろうか。ここに、制度的には受け入れられても、感情的には排除された植民者二世の事例を見ることが出来る。

②ギリシア最大の喜劇作者であるアリストファネスは、フッリッポスを父、ゼノドラを母とするキュダテナイ区のアテナイ人である。彼の生没年については、確かな伝承はないが、生年は前四四五年頃、没年は恐らく前三八五年頃と思われる。彼はアイギナと密接な関係にあった。前四二五年上演の『アカルナイの人々』には「かかる次第でラケダイモン人は諸君に平和を申し入れ、かつはアイギナを要求しているが、本心明かせばあの島などはどうでもよいので、ただこの作家を手に入れたいのさ。だが絶対に渡してはなりませぬぞ(653 ff)。」という一節があり、[8]これがそのことを暗示している。アリストファネスはアイギナにおいて分与地を与えられたと云われているので(Schol. Plat. Apol. 19c)、[9]アテナイがアイギナを植民市とした前四三一年以降に、彼または彼の父が当地に植民者として移住した可能性がある。[10]彼の息子のアリストクレイデスもアイギナ人と表記されている。[11]

アリストファネスは、ペロポネソス戦争中、平和論者としてクレオンやヒュペルボロスなどのデマゴゴスたちを攻撃していたので、政敵のクレオンによって非市民の嫌疑を掛けられた。[12]確かに、彼らの論点は本質的には戦争継続の是非をめぐるものであったであろうが、そこに出自という感情的な中傷が入り込む余地のあったことは、アテナイに住む市民と植民者との埋めがたいギャップの存在を感じさせる。

③プラトンの初期対話篇『エウテュフロン』は、ソクラテスとエウテュフロンがアテナイのバシレウスの役所の前でばったり出会い、そこでそれぞれの抱えている訴訟について語り、共通のテーマである敬虔とは何かについて議論するとい

うものである。エウテュフロンの一家がかつてナクソスに植民して農業に従事していた頃、彼のところの日雇い人が酔った勢いで一人の奴隷を殺してしまうということが起こった。彼の父はその男の手足を縛り付け、溝に突き落としたままにしておいて、殺人の汚れを払う方法を尋ねるためにアテナイの聖法解釈者のところへ人を送ったが、使いが帰ってくる前に、その男が死んでしまった。そのために彼は自分の父親を殺人の罪で告発したのである（Plat. Euth. 4c-d; 9a）。

エウテュフロンは予言者であり（Plat. Euth. 3e）、一種の狂信的な宗教家であった。彼ともう一つの対話篇『クラテュロス』に登場する語源研究に熱中しているプロスパルタ区のエウテュフロンとは（Plat. Kra. 396d; 399e; 428c）、その狂信的な性格から恐らく同一人物であったと考えられる。年齢については判らないが、状況からして、彼はナクソスで生まれた可能性はある。アテナイはナクソスを前四四七年頃から前四〇四年まで所有していたので、問題の事件はその間に起こったことになる。この訴訟が行われたのは、ソクラテスが告発されて裁判が始まるまでの予審の期間、即ち前三九九年の一月から二月のことと設定されているので、事件の発生から訴訟まで少なくとも五年の歳月が経過しており、不自然な観がある。しかし、アテナイの敗戦、民主政の崩壊、寡頭政権の樹立、内乱、民主政の復活という一連の混乱が訴訟を遅らせたのかも知れない。この人物が実在したかどうかは判らないが、彼および彼の訴訟がプラトンによる全くの創作であったとも考えにくい。むしろ恐らく、実際に似たような訴訟があり、アテナイ民衆の嘲笑をかったという事実を題材として採用したと考える方が自然であろう。[13]

問題は、なぜ主人公にナクソスからの引揚者が選ばれたのかということである。勿論、それが事実であったのかも知れない。しかしもしそれが創作であったならば、それはナクソスのイメージと結びついていたのではないであろうか。つまりナクソスは古来ディオニュソス信仰の中心地として有名であったので、そこから来た者が狂信者であったという設定である。もしそうならば、これはアッティカに住む市民が植民者を偏見の目で見ていたことを暗示していることになる。

これまで考察してきた植民者たちはいずれも、何らかの差別を受けた者たちであったが、同じ引揚者であっても、歓迎された訳ではないが、差別はされなかった者たちもいた。両者を対比することによって、差別の原因を探ってみよう。前四〇四年、アテナイがペロポネソス戦争に敗北した時、アテナイはサラミスを除く全ての植民市を失った。土地を失った植民者たちは続々と母市に引き揚げてきたのであるが、恐らくその中にエウテーロスがいた（Xen. Mem. 2.8）。彼については他の史料がないので、詳しいことは判らないが、彼はソクラテスの弟子であった。しばらくの間どこかの植民市で暮らしていたようである。しかし敗戦によって引き揚げ、久しぶりに師に出会い、現状と老後のことを話し合う。それによると、彼は外国に持っていた全ての財産を失い、また母市

にいる彼の父親は彼のためには何も残してくれていない。そこで彼は肉体を使う仕事に就くことを考えるが、その話しぶりから、彼はまだ老人ではないが、かといって青年でもない。働き盛りを少し過ぎた年齢であることが窺える。

彼の家には彼を養う余裕はなかったようである。彼もやはり引揚者として穀潰し扱いされたのかもしれない。しかし彼が今までに考察してきた他の植民者たちと異なっている点は、彼には母市に親類や知人がいたことである。彼にはソクラテスという師がいた。師は彼に今後の身の振り方について色々とアドバイスをしている。また彼の父親はアテナイにいた。母もいたかもしれない。彼は植民者の二世ではなかったのである。世代と面識の関係こそ、アテナイのような面識社会において、植民者が差別されるか否かの大きな決め手になったのではないであろうか。

第三章　したたかな植民者たち

植民者たちは虐げられてばかりいたのではなかった。彼らの中にはしたたかに母市をあしらい利用した者たちもいた。もっとも、そのような人物は実力者に限られるけれども。そのような植民者の例としてまずフィライダイの人々を見てみよう。彼らの一族は三代に渡ってケルソネソスを支配しており、彼らの植民以前、以後、そして帰国後の行動が詳しく伝えられている。そこから世代による態度の違いが窺い知ることが出来る。

①フィライダイはアテナイの裕福な名門であった。[14] ラキアダイ区に属するが、その祖先はアイアコスとアイギナに遡り、アテナイの国籍に入ったのはアイアスの子フィライオス以来のことで、比較的に新しい家柄であった（Hdt. 6.35）。またコリントスのキュプセロスとも姻戚関係にあったと云われている。ステサゴラスの子キモンは、ペイシストラトスの僭主政に不満を持って亡命したにもかかわらず、その間に二度オリュムピアの四頭立て戦車競争で優勝し、二度目の勝ちをペイシストラトスに譲って和解し、帰国を果たした。彼は前五二四年にペイシストラトスの子らによって暗殺されたが、その年にも同じ競技で優勝し、[15] 彼の異父兄弟であるキュプセロスの子ミルティアデスの偉業に並んだと云われている（Hdt. 6.103）。

②キュプセロスの子ミルティアデスは前六世紀の中頃、ケルソネソスのトラキア人の一派であるドロンコイ人から国家再建の指導者になって欲しいとの要請を受けた時、彼もペイシストラトスの支配に不満を感じていたのでそれに応じ、アテナイから植民者を率いて移住し、そこで専制支配を始めた（Hdt. 6.34-36）。彼はまず地峡に防壁を築いてアプシントス人の侵入を防ぎ（Hdt. 6.36）、次にランプサコス人と戦争したと伝えられている（Hdt. 6.37）。

③彼はその後、子を残さずに死亡したので、政権と財産は彼の異父兄弟であるキモンの子ステサゴラスに継承された。

死後ミルティアデスは、ケルソネソスの住民によって建国の祖として崇拝されたと云う（Hdt. 6.38）。ステサゴラスは元々、ケルソネーソスにいる叔父ミルティアデスの許で養育されていたらしい（Hdt. 6.103）。

④ステサゴラスも間もなく後継者を残さずに暗殺されたので（Hdt. 6.38）、ペイシストラティダイは前五二〇年頃、彼の兄弟であるキモンの子ミルティアデスを三段櫂船と共にアテナイから派遣して、半島の統治に当たらせた。彼が生まれたのは前五五〇年頃で、前五二四／三年にはアテナイでアルコンに就任しているので（Dion. Hal. 7.3.1; SEG. X. 352）、彼は元々はアテナイに住んでいたようである。彼は到着すると五〇〇の傭兵を雇い、ケルソネソスを手中に納めて、トラキア王オロロスの娘ヘゲシピュレと結婚した（Hdt. 6.39）。前五一三年頃、彼はダレイオスのスキュタイ遠征に参加した時、イオニア解放のために橋の切断を企てたが失敗した（Hdt. 4.137）。また前五〇五年頃、エライウスからレムノスに渡り、ペラスゴイ人から島を奪い、アテナイ人に与えて植民した（Hdt. 6.140）。

ミルティアデスは半島の当地にはあまり乗り気でなかったように思われる。前四九五年、ペルシアに圧迫されたスキュタイ人がケルソネソスに押し寄せた時、彼はそこに踏み止まらないで逃亡し、ドロンコイ人によって連れ戻されるという失態を見せた（Hdt. 6.40）。そして前四九三年、イオニア反乱が鎮圧された時、彼はとうとう全財産を五隻の三段櫂船に積んでアテナイ目指して出奔した。彼は途中フェニキア艦隊に襲われながらも這々の体でアテナイに帰還した（Hdt. 6.41）。

そんな彼はアテナイにおいては民衆に人気があり、英雄となった。帰国後、彼は反対派によってケルソネソスにおける僭主政の嫌疑で告訴されたが、結局は無罪となり、民会によってストラテーゴスに任命されて、前四九〇年のマラトンの戦いで指揮を執り、ギリシア軍を勝利に導いた（Hdt. 6.104）。名声を高めた彼は、前四八九年に多大な軍船と資金を民会に要求してパロス遠征を企てたが、それは失敗した（Hdt. 6.132-135）。このことがアテナイで問題となった時、特にアリフロンの子クサンティッポスは、彼を民会に召集してアテナイ人を欺瞞した罪で死刑にすることを提案したが、彼の数々の功績が斟酌されて、死刑は免れた。その代わりに五〇タラントンの罰金を課せられた。これを返済したのは、トラキア王オロロスの娘ヘゲシピュレと彼の間に生まれた子キモンであった（Hdt. 6.136）。

⑤ミルティアデスの子キモンは父とは違い、海外で大活躍した。彼は前五一〇年頃にケルソネソスで生まれたと思われる。彼は一〇代半ばまでその地に暮らしていたことになる。その間に、父の故郷アテナイ、母の故郷トラキアのタソス対岸に行ったことがあったかも知れない。前四八三／二年、ペルシアの再来に備えてテミストクレスが艦隊の整備を提案した時、キモンはいち早くそれを支持したと云われている

(Plut. Cim. 6.1-2)。彼がストラテーゴスになったのは前四七八／七年で、それはデロス同盟が結成された年であった。彼は直ちに同盟軍を率い、前四七七／六年にペルシア軍の残留するエイオンを攻略して植民者を送り込んだ（Hdt. 7.107; Thuc. 1.98)。この地は金銀の産地であり、以後アテナイに大きな富をもたらすことになったが、そもそもこのあたりは彼の母の故郷でもあった。続いて前四七五年にスキュロスを占領し（Thuc. 1.98)、テセウスの骨をアテナイにもたらした（Plut. Cim. 8.3-6)。前四六八年春に彼は、他の将軍たちと共に悲劇競演の審査員を勤め、この時ソフォクレスが彼の最初の作品『トリプトレモス』で優勝した（Plut. Cim. 8.7-8)。翌前四六七年、彼はエウリュメドンの海戦でペルシア艦隊に勝利し（Thuc. 1.100)、その戦利品を売却した金でアクロポリスの北壁を築いた（Plut. Cim. 13.5)。前四六六年、彼は残留するペルシア軍を追放して、ケルソネソスを再征服した。タソス反乱の二年後、前四六三年にキモンはそれを鎮圧して、多額の賠償金とタソスが持っていた本土側の権益がアテナイにもたらされた（Thuc. 1.101.3)。その後、マケドニアへの侵入が容易であったにもかかわず、それをしなかったため、マケドニア王に買収されたとの嫌疑を政敵のペリクレスらによって掛けられたが、無罪となった（Plut. Cim. 14.3)。

彼はスパルタに対しては友好的な態度を示した。スパルタの大地震をきっかけとしてヘイロータイが反乱を起こした二年後の前四六二年、スパルタがアテナイに救援を要請した時、キモンはスパルタに対する自分の友誼から、アテナイの反対意見を押し切って援軍派遣を決議させ、自ら将軍として赴いた。しかしアテナイ軍だけが追い返されたために、アテナイはそれを侮辱と感じ、スパルタとの同盟を破棄した（Thuc. 1.102-103; Plut. Cim. 15)。彼の威信も失墜した。不在中にエフィアルテスが改革を断行し（Aristot. Ath. Pol. 25)、ペリクレスとともに民主体制を固め、キモンは前四六一年に陶片追放にあった（Plut. Cim. 15.1-3)。

それでも彼はアテナイに対する忠誠心を失わなかった。前四五七年、タナグラでアテナイがスパルタと戦闘した時、彼は自ら兵士を率いて参戦した。アテナイは敗北を喫したが、彼の忠誠とスパルタに対する恐怖から、彼の追放を解いた（Plut. Cim. 17.8)。帰国したキモンは再び同盟艦隊を率いてエジプトおよびペルシア艦隊の基地があるキュプロスへ遠征し、華々しい戦果を上げた（Thuc. 1.112; Plut. Cim. 18.1-6)。しかし彼は遠征の終わる前に病死してしまった。彼の後は、フィライダイから歴史の表舞台に立つ者は絶えていなくなったようである。

以上のようなフィライダイの人々の行動を概観すると、それぞれの世代によって態度が微妙に異なっていることに気づくだろう。まず第一世代であるキュプセロスの子ミルティアデスは、ヘロドトスによれば、ペイシストラトスの僭主政を嫌ってケルソネソスへ向かったとされているが、実際には当

時シゲイオンに強い関心を示していたペイシストラトスとの共同作業であったと考えられている。[16] そこには彼の積極性が見て取れる。第二世代のステサゴラスについてはほとんど何も判らないが、キモンの子ミルティアデスは、ステサゴラスとは違って元々アテナイにおり、ペイシストラトスの子たちによって、むしろ強制的に派遣されたかの観が否めない。事実彼は半島に対する執着心を見せなかったのである。しかし第三世代である半島で生まれ育ったキモンは、アテナイに対する忠誠心を示しながらも、専ら海外で、特に母の故郷のトラキアおよび自分の生まれ故郷のケルソネソスで活躍した。アテナイの視点から見れば、彼の一連の行動はアテナイへの利益誘導として捉えることが出来るが、キモンの立場に立って見るならば、それは単にアテナイのためだけの行動ではなく、アテナイの戦略方針に沿いながら、自己の権益や生まれ故郷を奪還するためにそれをうまく利用していたとも取れる。彼はアテナイ人でありながら、むしろ多くケルソネソス人であったのかも知れない。

⑥次に、母市アテナイに戦争を仕掛けた男、イムブロスのアテノドロスについて見てみよう。彼の両親や生い立ちについては何も判らないが、彼は恐らくイムブロスに住むアテナイ植民者の子供であった。彼はしばしばイムブロス人とも（Aen. Takt. 24.10; Plut. Phoc. 18.4; Ael. V. H. 1.25）、アテナイ人とも（Le Bas et Waddington, Inscr. d'Asie Mineur, 1140＝Michel, 539(1)）表記されるが、市民権を付与された新市民とは区別されて、「生まれながらの市民」と表記されることから（Demosth. 23.12）、彼がアテナイ人であったことは間違いない。

前三六〇年、彼は傭兵隊長としてペルシアのサトラップであるアルタバゾスに仕え、レスボスの向かいにあるアタルネウスにおいて、アテナイの将軍フォキオンに対して戦った（Polyaen. 5.21）。前三六〇年、オドリューサイ王コトュスが死んだ後、トラキアの豪族ベリサデスとコトュスの子であるケルセブレプテスとアマドコスの三人の間に王位継承を巡る紛争が起こった時、アテノドロスは軍指揮官としてトラキアへ向かった。彼はその時、ベリサデスと姻戚関係を結んで（Demosth. 23.10）、彼を後押しした。また彼はその地方に都市を一つ建設したらしいが、詳しいことは判らない（Demosth. 23.170–176）。前三五九年、彼はケルセブレプテスに対して、アマドコス、ベリサデスおよびアテナイとの条約締結を強要したが、アテナイから十分な支援が得られなかったので、彼の試みは失敗した（Demosth. 23.170–176）。前三五八年、アテナイの将軍カレスがこの王位継承戦争をアテナイに有利なように解決するために、王国の分割を提案した時、またしてもアテノドロスが介入した（Demosth. 23.173）。

アテノドロスの名はイムブロスで発見された前三六〇年頃の評議会および民会の決議碑文にも現れる。それは彼がある遠征隊の指揮官たちに資金提供したことを示しており、その

人物が当該のアテノドロスと同一人物であることが認められている。[E] このことと先に見た彼の経歴から、彼がイムブロスにおいて相当の財力と権力を持った人物であったことが判る。前三五三年、サトラップであるオロンテスが王から離反すると、アテナイは彼を支援した。そのことによってアテナイはペルシアと敵対関係になった時、アテノドロスはまたもやペルシアの傭兵隊長となった。そして今度はペルシア王を後ろ盾として、未だに解決されていないトラキアの王位継承紛争に再び介入し、マケドニア王フィリッポスに対抗した。前三三四年、アレクサンドロス大王がペルシアに侵入した際、アテノドロスはサルディスのアクロポリスで逮捕されたが、後にフォキオンの取りなしによって釈放されたと云う(Plut. Phoc. 18.4; Ael. V. H. 1.25)。

彼の行動には強い自立性が窺える。ペルシア、トラキア、マケドニア、アテナイを股に掛けて活躍した彼にとっては、「母市」アテナイは相対化され、特別な存在ではなかったかのようにさえも思われる。もっとも当時は、生粋のアテナイ人であれ、アテナイ市民権を賦与された新市民であれ、傭兵隊長たちが闊歩した時代であったが。

⑦これまでの例は確かに特殊であった。一般民衆にそのようなことが出来たとは思えない。では、大多数の無力な植民者の行動とはどのようなものだったのであろうか。前四八〇年のアルテミシオンの海戦には、ペルシア王の支配下にあったギリシア人も多くペルシア勢として参戦していた。その中で唯一人、レムノス人アンティドロスは寝返ってギリシア勢に投降し、その功績に報いて、アテナイ人は彼にサラミスの土地を与えたと伝えられている(Hdt. 8.11)。彼については他の史料が残されていないので、これ以上のことは判らないが、彼は恐らくレムノスに住んでいたアテナイ植民者あるいはその子孫であったと考えられる。彼の行動は日和見的とも映るが、ペルシアとギリシアという二つの勢力に挟まれた地域に住む一介の民衆にとって、情勢を見極めてその時その時の強い方に味方することが彼に残された唯一の生き残りの道であったのであろう。

第四章　もの言わぬ植民者たち

諸個人の態度や意識を語る雄弁な植民者の事例を探すとすれば、議論はどうしても歴史上の人物に集中してしまう。多くの場合、彼らは貴族でありエリートであった。彼らは大多数の民衆とは同レベルには扱えない。そこで少しでも史料の偏重を是正するために、もの言わぬ植民者たちの墓碑銘を分析しよう。植民者にとって墓碑は、その前を通りかかるであろう人に対する、自分がその地に生きたことの証であり、自分のアイデンティティーの主張でもあったと考えられるからである。

墓碑史料は数も種類も多い。また同じ形態の墓碑銘でも状況によって意味が異なる。そこで帰属意識を正確に読み取る

ためには、二系統の分類が必要となる。第一は公私による分類で、私的な墓碑（単身墓碑と家族墓碑を含む）と公的な戦死者名簿に分けられる。前者には個人的な感情が、後者には国家の思惑が反映されるであろう。第二は出土地による分類で、植民市出土と母市出土に分れられる。前者では植民市で一生を終えた植民者の、後者では母市に帰国して一生を終えた植民者の意識が刻まれるであろう。

まず本章の考察対象となる二三〇例の墓碑銘を上記の二系統に分類した上で、そこに現われるアイデンティティー表現の要素とパターンを抽出して見よう。

I　私的な墓碑

	C植民市出土 (m)男	C植民市出土 (f)女	M母市出土 (m)男	M母市出土 (f)女
(1)名＋父名＋区名	57	6	0	0
(2)名＋区名	12	0	1	0
(3)名＋父名	16	10	2	2
(4)名	24	25	1	2
(5)名＋父名＋植民市名	3	1	8	5
(6)名＋父名＋母市名	1	0	0	0
(7)名＋植民市名	2	0	6	2
(8)名＋父名＋ξς＋植民市名	0	0	0	2
(9)名＋ξς＋植民市名	0	0	2	0
(10)名＋植民市名	0	0	4	0
(11)部族名＋名	0	0	19	0
(12)植民市名＋部族名＋名	15	0	0	0
(13)部族名＋植民市名＋名	0	0	0	0

この表から、アイデンティティーの表現法には「区名」「部族名」「都市名」（「母市名」と「植民市名」を含む）の3要素があること、実際の用例には「名＋区名」＝(1)、(2)、「名」＝(3)、(4)、「名＋都市名」＝(5)、(6)、(7)、(8)、(9)、(10)、「名＋部族名」＝(11)、「名＋部族名＋都市名」＝(12)、(13)、の五パターンに大きく分類されることが明らかとなる。

ではこれら五パターンからどのような帰属意識が読み取れるであろうか。まず「名＋区名」について見てみよう。(1) C (m)の例として Ἐλπίππο[ς] Ἀμεινοκλέιδο(υ) Ἀχαρνεύς、[18] (1) C (f)の例として Ἡδυλίνη Νικοδήμου θυγ. Ξυπεταιόνος、[19] (2) C (m)の例として Σωκράτης Λαμπτρεύς、[20] (2) M (m)の例として Νικόμαχος Πε(ι)ραιεύς、[21] が挙げられる。このパターンは、そのほとんどが植民市で検出される。というのも、これは本来、母市における正式な記名法であるために、これが母市で検出された場合には、特別な証拠がない限り、母市に住む市民のものと看做されるので、母市での検出例はほとんどない

のである。その唯一の例外については特別な言及が必要なので後で述べることとして、このようにこのパターンが植民市において大量に検出されるということは、植民者が母市市民団に対して尚も強い帰属意識を持っていたことの証拠と考えて間違いない。

では「名」だけのパターンはどうか。(3) C(m)の例として ['E]πιχάρης[23] ['Αντι]δχου[22]、(3) C(f)の例として Βοιδίον Δωρίωνος θυγ.、(3) M(m)の例として Δεινόδοτος〈'Α〉λ〈ρ〉ίνου[24]、(3) M(f)の例として Πλαγγὼν Χαρίου γυνή[25]、(4) C(m)の例として Εὐανδρος[26]、(4) C(f)の例として 'Αβραιτόρα[27]、(4) M(m)の例として Λάμπων[28]、(4) M(f)の例として Καλλιστρὰ[τη][29]、が挙げられる。これには区名が付されていないという理由から、母市市民団への帰属意識の欠如を指摘することが出来るであろうか。これは、本来刻まれていた区名が偶然に欠損したのかも知れないし、帰属意識を持っていてもたまたまここではそれを表現しなかっただけかも知れないし、家族墓碑の場合に先行する人名に区名が付されているので次の人には省略されただけかも知れない。また表から明らかなように、このパターンが比較的多く女性に見られるのは、女性は区名を付されず名だけで記されることが多かったことに由来する。またそもそも墓主が植民者でない可能性も大いにある。従って母市出土であれ植民市出土であれ、このパターンから帰属意識を読み取ることは不可能と言わざるを得ない。

次に「名＋都市名」を見る。(5) C(m)の例として 'Αναγίνης Διονυσοδ ὥρο[υ] Ποτειδαιεύ[ς][30]、(5) C(f)の例として [---] Θεοπόμπου Σαλαμῶνία[31]、(5) M(m)の例として Λέων Πειθίου Σαλαμίνιος[32]、(5) M(f)の例として Δημητρία Χ[---c.4-5---] Σαλαμ[ῖνία][33]、(6) C(m)の例として Α'νξας Δημοστράτου 'Αθηναῖος[34]、(7) C(m)の例として [---] Σαλαμίνιος[35]、(7) M(m)の例として 'Αρίστοδίκη Σηστία[36]、(8) M(f)の例として Μνησαρέτη Φιλωνίδο(υ) ἐτ Μυρίνης[37]、(9) M(m)の例として Κρίτίας ἐξ 'Ηφαιστίας[38]、(10) M(m)の例として Καλλία[ς Μαδ]ύτιος[39]、が挙げられる。都市名の内、植民市名を名乗るということは、出土地を問わず、やはり植民市への帰属意識の現われと考えて良いであろう。従って植民市名を刻んだ墓碑が植民市から出土する場合には、それが母市よりも植民市により強い帰属意識を持つようになった植民者の墓碑と看做すことも出来ないではないが、むしろ現地人のそれと看做すほうが自然であろう。また植民市名を刻んだ墓碑が母市から出土する場合には、個人の墓碑ならば、それが帰国した植民者か或いは在留外人の可能性があるが、それだけでは判断出来ない。また公的な戦死者名簿ならば、共に戦った同盟者である可能性が高い。一方、母市名が刻まれた墓碑が植民市から出土する場合には、彼が植民者か或いはアテナイ市民権を付与された現地人の可能性があるが、いずれにせよアテナイへの帰属意識を示すものと理解すべきであろう。またこの種の墓碑が母市から出土しないのは、その意味上当然と言えよう。

最後に「名＋部族名」及び「名＋部族名＋都市名」について検討しよう。(11) C(m)の例として *Ἱππόθοντός· Ἀντιοκίδης*、(41)(12) M(m)の例として *Λημνίων ἐγ Μυρίν[ης]· Ἐρεχθεῖδος· Σόλων*、(43)(13) M(m)・の例として *Ἱππόθοντίδος· Λήμνιον· Δεχατίνομος*、が挙げられる。このパターンも、部族の構成要素が区であるからには、「名＋区名」同様に、母市に対する強い帰属意識の現われと見て良い。従って部族名と植民市名の並記のパターンからは、母市と植民市の両方への帰属意識が読み取れる。彼らは恐らく植民者であり、母市市民と共に戦って戦死した者たちであろう。母市市民と植民市市民は、呼称においてはアテナイ人とレムノス人というふうにそれぞれ異なるが、名簿の中では両者は同じ部族毎にまとめられ得る程の絆を持っていた。

ここまでの考察をまとめると、「区名」「部族名」「母市名」は母市への、「植民市名」は植民市への、そして「部族名＋植民市名」は両方への、帰属意識の表明であることが明らかとなった。そこで次に問題になるのが、母市植民市両方への二重の帰属意識についてである。植民者がこのような意識を持つことは、言わば当然の行為かも知れない。しかし彼らは一見矛盾する二重の帰属意識を彼らの理念においてはどのように合理的に統合していたのであろうか。この点が問われなければならない。なぜならば、この点こそ母市と植民市を結び付ける精神的基盤になっていたと考えられるからである。

既述の戦死者名簿以外にも、二重のアイデンティティーを示す史料は幾つかある。(44) 例えば *Ἀγδρ⟨ω⟩νεδης Ἀνδρ⟨ω⟩νίδου Εὐ[...] Σαλαμίνιος* と刻まれた前四二五年頃のものと思われるサラミス出土の墓碑である。まず注意すべき点は、*Σαλαμίνιος* という植民市名が付されていることである。この場合サラミス出土の墓碑に刻まれたサラミス人であることから、これは植民市への帰属意識の現われと見なすことが出来る。次に問題になるのは、父名の次にある *Εὐ[...]* である。これは何か。可能性は二つある。一つは区名、もう一つは祖父名である。もし前者であるならば、エウオニュモン区かエウピュリダイ区ということになる。そうであるならば、墓主はアテナイの植民者であり、母市と植民市への二重の帰属意識を持っていることになる。しかしこれはあまりにも不確かな証拠と言わざるを得ない。

明確な証拠は、前四世紀のものと思われるアッティカ出土の単身墓碑である。そこには「ペイライエウス区の人ニコマコス、ここにあるこの塚は、聖なる土地レムノスから来た男を埋葬している、彼は家畜好きであった。*Νικόμαχος Πε(ι)ραιεὺς Λήμνο(υ) ἀπ' ἠγαθέας κεῦθει τάφος ἐνθάδε γαίας ἴνδρα φιλοπρόβατον.*」(45) と刻まれている。彼がペイライエウス区の人として母市への帰属意識を表明していることは明らかである。それと同時に植民市への帰属意識も主張している。恐らく彼は、植民者の子としてレムノスに生まれたのであろう。母市に帰国した後、牧童をしていたのかも知れない。墓碑がルートロフォロスの形をしていることから、彼が若くし

て独身のまま死亡したことが推測される。そしてペイライエウスに埋葬されたのである。これは、植民者の帰国の一事例としても興味深い。墓碑の年代について、Koehler は植民者がレムノスから追放された前四〇四年から前三八七年の間と見るが、[46] Clairmont は下限をより広く見積もる。[47] また Graham もこの期間にこだわらず、墓主はアッティカ訪問中に死んだ可能性もあるとする。[48] 彼の帰国を植民者の追放の時期と結び付けて考えようとする傾向もあるが、Cargill は年代を前三九九年から前三〇〇年までのより長い範囲に取り、追放と帰国の因果関係にこだわらず、前四世紀においては植民者は自由意思によって帰国出来たのではないかと考えている。[49] 最後の解釈を受け入れたい。

二重のアイデンティティーを最も明確に示す証拠は、アッティカ出土の *Διονύσιος〈Ἀ〉λ〈φ〉ενω*[50] の墓碑である。問題はその土台に刻まれた銘で、そこには「さらにまた二重の祖国、つまり生まれによる祖国と法による祖国が大いなる節度の故に汝を愛した。*δισσαὶ δ' αὖ πατρίδες σ' ἡ μὲν φύσει, ἡ δὲ νόμοισιν ἔστερξαν πολλῆς ἕνεκα σωφροσύνης.*[51]」と書かれている。この墓主が前三四六／五年にサモスにおいて財務官を勤めた *Διονύσιος Κολλυτεύς* と同一視されることは一般に認められている。[52] 従って彼は、遅くとも前三四六／五年までサモスに留まり、その後帰国して死亡し、埋葬の際にこのような墓碑銘を与えられたことになる。これもまた帰国の事例としても興味深い史料であるが、「生まれによる祖国」*ἡ μὲν φύσει* と「法による祖国」*ἡ δὲ νόμοισιν* という表現は殊更に興味深い。このことから墓主が二つの祖国を意識し、それらを言い分けていたことが明確となる。しかしこの史料は、それぞれの語が母市と植民市のどちらを意味するのか、また二重の帰属意識がどのように矛盾なく統合されるのかと言った肝心なことには答えてくれない。これが墓碑史料の限界である。

そこで先に見たアテノドロスの事例と比較してみよう。彼は同時代史料によって「生まれながらの市民アテノドロス」*ὁ δὲ δὴ γένει πολίτης Ἀθηνόδωρος*[53] とも「アテナイ人」*Ἀθηναῖος*[54] ともまた「イムブロス人アテノドロス」*Ἀθηνόδωρος Ἰμβριος*[55] とも呼ばれていた。彼はイムブロス植民者の子で、恐らくは当地で生まれたのであろう。しかしここで言う「生まれながらの」とは、生まれた場所のことではなく、むしろ血筋のことを指していると考えるほうが妥当であろう。なぜならばこの表現は、市民権を付与されてアテナイ市民になったカリデーモスとの対比において言われた言葉であるからである。つまり、彼は血筋においてはアテナイ市民と呼ばれ、生まれ育った場所によってはイムブロス人と呼ばれたのである。すると「生まれながら」という表現は、区名が父から子へと受け継がれていくことと同意義と解せるかも知れない。翻ってこのことを *Διονύσιος〈Ἀ〉λ〈φ〉ενω* に当てはめて見ると、*φύσει* と *γένει* の違いはあるが、「生まれによる祖国」とは血筋による祖国、即ち母市アテナイを、

「法による祖国」とは植民者の従うべき諸規定による祖国、[56]即ち植民市サモスを意味すると考えられるであろう。このような意識構造が一見矛盾する二重のアイデンティティーを統合していたと言えるのではないであろうか。

ただし二つのアイデンティティーは並列の関係にあったのではない。この墓碑が母市で出土したことからすれば、墓主がアテナイを敢えて祖国と呼ぶことからは、逆に祖国からの疎遠さを感じずにはいられない。またそれと並んでサモスをも祖国と呼ぶことからは、サモスへのより強い愛着が感じられる。ここに母市市民と植民者という二つのアイデンティティーの理論的統合と心理的分離が窺われるように思われる。

結　論

一口でアテナイ植民者と言っても彼らの感情や態度は様々であった。法的には同じアテナイ人でありながら帰国して母市市民によって差別された植民者たちもいた。逆に、母市を自己の目的のために利用したり、戦争を仕掛けたり、両天秤に掛けたりしたしたたかな植民者たちもいた。このような実態を見れば、たとえ母市市民権を保持していようとも、植民者の立場から見れば、母市市民と植民市市民が緊密な関係にあったとか、植民市が母市に従属していたとは必ずしも言えないのではないであろうか。

確かに、植民者は母市と植民市双方に対するアイデンティティーを「生まれによる祖国」と「法による祖国」として矛盾なく併せ持っていた。しかしそのアイデンティティーは母市からの距離と世代によって大きく左右されたようである。非常に自立的な植民者二世が母市から四日行程離れたケルソネソスやイムブロスから生まれたことは偶然ではあるまい。また植民市を祖国と呼ぶことこそ、母市からの精神的分離を暗示している。

では、母市アテナイはこのような分離傾向にある植民市をどのようにして自らに繋ぎ止めようとしたのであろうか。前四世紀になると、それまで例えば「レムノス人」と表記されていた植民者が「レムノスに住むアテナイ人」というふうに表記されるような変化が生じたことはよく知られている。この現象と分離傾向とは何らかの関係があるのではないであろうか。この点は今後の課題としたい。

註(1)　A. Boeckh, *Die Staatshaushaltung der Athener*, Berlin ³1886[¹1817], S. 499-509; Ed. Meyer, *Geschichte des Altertums*, Stuttgart ²1915, S. 15-22; ders, *Forschung zur alten Geschichte*, Halle 1899, S. 182-183; U. Kahrstedt, *Staatsgebiet und Staatsangehrige in Athen, Studien zum öffentlichen Recht Athens*, Stuttgart 1934, S. 34; H. Berve, *Miltiades, Studien zur Geschichte des Mannes und seiner Zeit*, Hermes Einzelschrift 2, 1937, S. 51-53; V. Ehrenberg, Zur älteren athenischen Kolonisation, *Eunomia, Studia Graeca et*

Romana I, Prag 1939, S. 11-32; B. D. Meritt / H. T. Wade-Gery / M. F. McGregor, *The Athenian Tribute Lists*, Princeton 1950, p. 284-297. A. J. Graham, *Colony and Mother City in Ancient Greece*, Manchester, 1964, p. 166-210.

(2) 植民者のプロソポグラフィックなデーターは専ら J. Cargill, *Athenian Settlements of the Fourth Century B. C.*, Leiden·New York·Köln, 1995（以下 JC と略す）を使用した。この本は、前四世紀のみならず、それ以前とそれ以後の植民者およびそれに関連する一五〇〇以上に上る人物の情報をまとめたデーターベースである。その他、J. Kirchner, *Prosopographia Attica*, reprint, Chicago, 1981, Berlin, 1901-1903（以下 PA と略す）; *A Lexicon of Greek Personal Names, vol. 1, The Aegean Islands, Cyprus, Cyrenaica*, ed. by P. M. Fraser / E. Matthews, Oxford, 1987（以下 LGPN. 1 と略す）; *A Lexicon of Greek Personal Names, vol. 2, Attica*, ed. by M. J. Osborne / S. G. Byrne, Oxford, 1994（以下 LGPN. 2 と略す）も参照した。

(3) 小西晴雄訳、『トゥーキュディデース』世界古典文学全集11、筑摩書房、一九七一年、二〇七頁。

(4) 飯尾都人訳、ストラボン『ギリシア・ローマ世界地誌』I、龍渓書舎、一九九四年、四頁。

(5) 小西、前掲書、一一・八九・二〇七頁。

(6) H. L. Jones, *The Geography of Strabo* III, Loeb Classical Library, 1924, p. 38, n. 1; p. 39. n. 2. ここで言及されたポリュビオスの数字は、そのオリジナルが残されていないため、比較して検証することが出来ない。

(7) V. Arnim, "Epikouros", *RE*, S. 133.

(8) 村川堅太郎訳、「アカルナイの人々」、『ギリシア悲劇』I アリストパネス（上）、筑摩書房、一九八六年、四三頁。

(9) 「彼はまたテオゲネスがアイギナ誌に載するところによればアイギナに分配地を与えられたり。」村川、上掲書、一〇一頁。

(10) Hans Gärtner, "Aristophanes. 3", *Der Kleine Pauly*.

(11) 村川、上掲書、一〇二頁。

(12) ラヴェンナ本古注の本編二八頁註（3）「クレオンが彼に対し非市民なりとの訴えをなした。」村川、上掲書、一〇一頁。

(13) 訳と解説は、今林万里子訳、「エウティプロン」、『プラトン全集』1、岩波書店、一九八〇年を参照した。

(14) フィライダイ及びキモンの行動については、桜井万里子、「「雅量」の人・キモン —そのエートスのアテナイ民主政における位置—」、同『古代ギリシア社会史研究』岩波書店、一九九六年、三七五—三八〇頁に詳しい。

(15) 彼の優勝については、一回目は前五三二年、二回目は前五二八年、三回目は前五二四年のことである。Hans Gärtner, *Der Kleine Pauly*, s. v., Kimon. 1.

(16) 桜井、上掲書、三七九頁。

(17) P. Foucart, "Inscriptions des clérouques Athéniens d'Imbros", *BCH*, 7, 1883, p. 160-162; IG. XII. 8.48.

(18) JC. 494′ 前三九九—三〇〇年′ レムノスのミュリナ出土。同類の他の事例′ JC. 71; 83; 92; 114; 353; 397; 414; 422; 425; 426; 427; 447; 468; 483; 504; 557; 569; 590; 598; 625; 630; 631; 650; 674; 687; 712; 763; 802; 806; 823; 825; 837; 890; 917; 930; 969; 991; 1017; 1018A; 1029; 1046; 1049; 1076; 1107; 1124; 1147; 1162; 1204; 1206; 1214; 1343; 1386; 1387; 1397; 1401; 1457.

(19) JC. 597′ 前三九九—三〇〇年′ サラミス出土。同類の他の事例′ JC. 22; 980; 1250; 1380; 1390.

(20) JC. 1197′ 前三六五—三二二年′ サモス出土。同類の他の事例′ JC. 180; 392A; 566; 630A; 550A; 888; 1035; 1038; 1125; 1411; 1431.

(21) JC. 1023′ 前三九九—三〇〇年′ アッティカ出土。

(22) JC. 457′ 前三九九—三〇〇年′ オリュントス出土。恐らくポティダイアから移動させられた。同類の他の事例′ JC. 240; 337; 422A; 642; 776; 864; 911; 985; 1157; 1213; 1219; 1243; 1244; 1400; 1531.

(23) JC. 264′ 前三七五—三二五年′ サラミス出土。同類の他の事例′ JC. 39; 260A; 778; 780; 1282; 1314; 1339; 1488; 1423.

(24) JC. 365＝367′ 前三四六—三三八年′ アッティカ出土。

(25) JC. 1098′ 前三九九—三〇〇年′ アッティカ出土。同類の他の事例′ JC. 241.

(26) JC. 481′ 前三九九年頃′ スキュロス出土。同類の他の事例′ JC. 270; 344; 524; 615; 643; 661A; 685; 688; 689; 707; 723A; 732; 756; 921; 979; 1044; 1154; 1158; 1342; 1516; 1519; 1523; 1544.

(27) JC. 5′ 前三七五—三二五年′ サラミス出土。同類の他の事例′ JC. 76; 194; 205A; 219; 284; 298; 501; 622; 781; 794; 826; 859; 897; 920; 952A; 959; 1024; 1210; 1263; 1290; 1306; 1341; 1500; 1543.

(28) JC. 834′ 前三九九—三〇〇年′ アッティカ出土。

(29) JC. 747′ 前三九九—三〇〇年′ アッティカ出土。同類の他の事例′ JC. 692.

(30) JC. 43′ 前三七五—三二五年′ ポティダイア出土。同類の他の事例′ JC. 97; 610A.

(31) JC. 668′ 前三七五—三二五年′ サラミス出土。

(32) JC. 855′ 前三九九—三〇〇年′ アッティカ出土。同類の他の事例′ JC. 130; 164; 182; 186; 1087; 1088; 1119.

(33) JC. 310′ 前三二五—三〇〇年′ アッティカ出土。同類の他の事例′ JC. 978; 999; 1053; 1063.

(34) JC. 40′ 前三九九—三〇〇年′ サモス出土。

(35) JC. 1478′ 前三九九年頃′ 出土地不明′ サラミスか。同類の他の事例′ JC. 1478.

(36) JC. 149′ 前三九九—三五〇年′ アッティカ出土。同類の他の事例′ JC. 372; 951; 965; 1173; 1350.

(37) JC. 174′ 前三九九—三五〇年′ アッティカ出土。同類の他の事例′ JC. 30.

(38) JC. 953′ 前四五〇—四二五年′ アッティカ出土。同類の他の事例′ JC. 596.

(39) JC. 812′ 前三九九—三五〇年、アッティカ出土。同類の他の事例′ JC. 946.

(40) JC. 733′ 前四六四年、アッティカ出土。同類の他の事例′ JC. 1472.

(41) JC. 73′ 前五〇〇—四八〇年、レムノスのヘファイスティア出土。名簿に記載された他の名′ JC. 402; 508; 832; 861; 1043; 1262; 1279; 1428; 1429; 1480; 1499; 1509; 1514; 1524.

(42) JC. 1166′ 前四五〇—四〇〇年、アッティカ出土。名簿に記載された他の名′ JC. 2; 64; 87; 204; 216; 235; 304; 404; 550; 670; 744; 983; 1060; 1073; 1092; 1258; 1324; 1360.

(43) JC. 300′ 前四五〇—四〇〇年、アッティカ出土。名簿に記載された他の名′ JC. 408; 552; 927.

(44) JC. 97.

(45) JC. 1023; IG.II²7180.

(46) IG.II²7180.

(47) Clairmont, C. C., *Gravestone and Epigram, Greek Memorials from the Archaic and Classical Period*, Mainz on Rhein, 1970, No. 80, p. 154-155.

(48) Graham, *op.cit.*, p. 186.

(49) Cargill, *op.cit.*, p. 99.

(50) JC. 365＝367′ 前三四六—三三八年。

(51) IG.II²11169.

(52) Cargill, *op.cit.*, p. 111-112.

(53) Demosth. 23.12.

(54) Foucart, P., Incsriptions des clérouques athéniens d' Imbros, *BCH*, 7, 1883, p. 160-162.

(55) Aen. Tact. 24.10; Plut. Phoc. 18.4.

(56) この表現は、前四六〇年頃に刻まれた東ロクリスからナウパクトスへの植民者に関する碑文（ML. 20.1-2）に見られる、「ヒュポクナミデイオンのロクリス人は、ナウパクトス人になった後には、ナウパクトス人であるので…」*λοκρὸν τὸν ψποκναμιδίον, ἐπεί κα Ναυπάκτιος γένηται, Ναυπάκτιον ἐόντα...* という規定を想起させる。「法による祖国」とは、このように植民に伴う規定に従って得た祖国のことを意味するものと思われる。ナウパクトス碑文の分析については、拙論、「前五世紀におけるアテーナイ植民者の市民権 —その両義性をめぐって—」、『西洋古典学研究』四三号、一九九五年、三二—四一頁、参照。

Identity of the Athenian Colonists
——A Prosopographical Approach——

by Hiroshi MAENO

Studies of the relationship between Athens and her colonies so far have been mainly focusing attention on the legal status. They tried to determine which colony had the Athenian citizenship and which had not. They have regarded colonies holding the Athenian citizenship as to be closely connected to their mother city automatically. They have thought that the Ahtenians were able to make use of such colonies as one of their instruments to rule over their empire, i.e. garrison or military colony. In fact, however, it is not undoubted that the citizen-colonies were closely connected or submitted to their mother city. Indeed it could be said in the legal sphere. But this is just an image gained from a view point of the citizens living in Athens. Laying the view point on the colonists' side and focusing attention on the emotion of the colonists to their mother city and the attitude of citizens in Athens towards the colonists themselves should lead us to a different conclusion. Identity, which must have determined the action of the colonists, is not always the same as citizenship. In this paper the following four points will be discussed:

1) The physical and mental distance between the colonies and their mother city will

be examined. The physical distance should have a great influence on their mental relationship. Most of the colonies lie in the sphere of three-or-four-day-travel.

2) The fact that some colonists were discriminated by the citizens in Athens for lack of persons who recognized them will be made clear.

3) The fact that some colonists were able to make use of their mother city for their own purpose or some challenged against the mother city will be dealt. The attitude of the colonists towards the mother city depends upon their generation.

4) The examinations above are limited by materials to the cases of historically well known people. In order to research the emotion of the common people 230 epitaphs available will be analysed. Some show that the colonists had dual identity both to the colony and to the mother city.

These facts suggest that Athens as the mother city was always challenged by the separating tendency of the colonies. However, Athens could manage to overcome it. Therefore, there mains a second question: How could Athens do that? This question will be discussed on another occasion.